

はじまりから、いま。 古代美術、印象派、そして現代へ

1952—2022 アーティゾン美術館の軌跡

アーティゾン美術館（京橋） 2022.01.29～04.10



「アーティゾン美術館」は、5年間の休館と改名を経て2020年に新たに開館した美術館である。

本館の前身となる「ブリヂストン美術館」の創設者「石橋正二郎」氏は、実業家として成功を収める一方、日本や西洋の近代美術を中心とするコレクションを築き美術館を設立して、1956年に石橋財団を設立していることで名高い。

本展は、1952年の「ブリヂストン美術館」開設から70年の歴史を持つ「アーティゾン美術館」のこれまでの軌跡を、「約170点」の作品を展示して紹介をしている。

藤島武二 《東洋振り》1924年(左) 《黒扇》油絵/麻布(重要文化財)(右)

《東洋振り》は、西洋の肖像画のようでありながら、人物と衣装は中国風のエキゾチックな魅力に溢れた作品である。

《黒扇》は、油絵的体質に恵まれ、自己様式を力強く展開させた作品で、渡欧時代の秀作の一つで好んで描いた夫人像の代表作である。

クロード・モネ 《黄昏 ヴェネツィア》1908年 油彩/カンヴァス



画伯は67歳時に静養目的で、妻とイタリア・ヴェネツィアを始めて訪れ、約2か月間の滞在中に美しい都市であると感じて「約30点」の作品を制作した。

夕日に赤々と染まる夕暮れの「サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会」に、黄昏の空と海はひとつになって、右側にもかすかに教会堂の影が描かれている。

ジャン・メッツアンジェ 《円卓の上の静物》1916年



何がどのように描かれているのかよく理解できないが、その巧な表現に心引かれる美術「キュビズム」(20世紀にフランスに興ったアヴァンギャルド芸術)であり、そのままとまって観賞できることは少ない作品のひとつである。

キュビズム・コレクションの披露目作品は、アルベール・グレーズ《手袋をした女》1922年頃などが展示されている。